

## はじめに

カルヴァンの神学における聖餐と教会形成について考察した後、今日の教会形成における聖餐の意義について論じたい。

### 1. カルヴァンの教会論

#### (1) 契約共同体としての教会

カルヴァンは、教会を契約共同体として理解し、旧約と新約の一貫性を強調する。

旧約と新約の関係「全ての父祖の与った契約は、本質と事柄自体において我々のそれと何ら相違せず、全く一つであり同一である。ただ、処理の仕方〔アドミニストラティオ〕が違う。」その同一性とは、第一に、旧約の民も「肉的な豊かさや幸いでない」「不死の希望に選ばれたい」ということ、第二に、「彼らが、主と結んだ契約は彼らの功績によらず、ただ彼らを召した神の憐みにのみ懸かっている」ということ、第三に、「彼らを神と結び付け約束に与らしめる仲保者としては、彼らもキリストを待ちキリストを知っていた」ということである（『キリスト教綱要』Ⅱ・10・2）。<sup>1</sup>

もちろん、カルヴァンは旧約と新約の相違についても指摘をしている。（Ⅱ・11）。しかし、旧約と新約の相違点を指摘する場合でも、「霊的な約束」が「地上的なものの象徴」によって啓示され、それが「天上の嗣業の予型〔テュプス〕」であったことを強調する。（Ⅱ・11・2）。

旧約と新約が一貫したものである以上、新約聖書の教会を理解するために旧約聖書にまでさかのぼるのは当然である。カルヴァンは、教会のかしらであるキリストの職務を、旧約聖書における預言者、王、祭司の三職であると理解する。そして、これらの三職を担うキリストによって建てられた神の民が教会であると考えてるのである。教会はキリストによって建てられ、キリストの職務に参与する契約共同体であり、キリスト者はこの契約共同体の一員として天上の生の恵みに与るのである。

#### (2) 終末共同体としての教会

キリストの預言者、王、祭司としての職務は、一時的なものではなく永遠のものである。これらキリストの三職のうち、カルヴァンは、王としての職務の永遠性を強調する。（Ⅱ・15・3、4）。カルヴァンにとって教会とは天上の生を約束された民から成るキリストの王国であり、神の民は天上の安息を目指してこの世を歩む民である。十戒の第四戒の講解（Ⅱ・8・34）。使徒信条の中のキリストの再臨（Ⅱ・16・18）。信仰の主要な確信「来るべき生への期待」（Ⅲ・2・28）。天上の生への希望（Ⅲ・6・5）。

「我々はどのような種類の艱難に圧迫されても、現世の生を軽んじ、それによって来るべき生への瞑想に駆り立てられるという目標を、常に思い見なければならない」（Ⅲ・9・1）。「この世の生は全体として救いを推進するように定められて」おり、神の民は「この世で天国の栄光に入る謂わば準備をしている」のである（Ⅲ・9・3）。「この世は謂わば主が我々を配置された部署であって、我々は呼び戻されるまでは、ここを守り抜かねばならない」（Ⅲ・9・4）。

キリストの再臨は、キリスト者が「呻きと嘆息をもって全ての内で最も祝福されたこととして期待する」べきことである（Ⅲ・9・5）。「祝福された復活を倦まず弛ま

<sup>1</sup> 以下、カルヴァンの著作からの引用は、ジャン・カルヴァン『キリスト教綱要』改訳版、第1・2篇、第3篇、第4篇（渡辺信夫訳、新教出版社、2007年、2008年、2009年）による。

ず瞑想することを身につけた者にして初めて、福音において確実に前進できる」(Ⅲ・25・1)。教会は単なるこの世における共同体ではなく、終末における天上の生を目指して成長する共同体なのである(Ⅲ・25・10)。

### (3) 聖餐共同体としての教会

不可視の教会とは「神の前に真実である実体」であり、「そこには子とされる〔アドプティオ〕恵みによって神の子とされている者たち、また御霊の聖化によってキリストのまことの肢とされている者の外は何も受け入れていない団体」で、「世の初め以来の全ての選ばれた民をも含む」のである。

可視的教会とは「地球上に拡がって、一人の神、一人のキリストを礼拝すると表明し、洗礼によって彼を信じる信仰に入り、聖晩餐に陪餐して真の教理と愛における一致を証しし、主の御言葉に同意し、またキリストによって立てられた説教の務めを保全している人々の全体」である(Ⅳ・1・7)。キリストの体としての教会を識別する目印としては、「神の言葉が真摯に説教されまた聞かれる所、聖礼典がキリストの制定に従って執行されると見られる所」という二つの目印がある(Ⅳ・1・9)。

聖礼典のうち洗礼を「入門の徴」とし(Ⅳ・15・1)、聖餐を「霊的祝宴」と位置づける(Ⅳ・17・1)。終末共同体である教会は、信仰をもって聖餐に与ることによって終末の祝宴の喜びを前もって味わう。

## 2. カルヴァンの聖餐論

カルヴァンは制定語の「～である」のゆえに、キリストの現臨を重視した。しかし、それは天上の生けるキリストが聖霊によって現臨するという意味であった。<sup>2</sup>

聖餐においてキリストは霊的に現臨する(Ⅳ・17・10)。カルヴァンは、パンとぶどう酒がキリストの肉と血を象徴する「徴」であることを認めるが、それだけでなく聖餐の執行においては「霊的な実体」が同時に提示されることを主張する(Ⅳ・17・11)。しかも、復活し昇天したキリストの体は天にあるのだから、それがパンとぶどう酒の内にあるのではない。「キリストの体が朽ち行く要素〔パンと葡萄酒〕の下に押し留められるとか、あるいはどこにでもあるとか空想するのは、全く不正である」とカルヴァンは述べる(Ⅳ・17・12)。昇天後のキリストの体はあくまでも天上にあるというのである。それゆえ、カルヴァンはキリストの体が天上にあることを強調しつつ、生けるキリストが聖霊によって現臨し、共にある(Ⅳ・17・18)。

このように、キリストの体が天上にあることを強調し、キリストとの結合は聖霊によると考えるのが、カルヴァンの神学の大きな特徴である。カルヴァンは、ルターと異なりキリストの昇天を「場所的移行」と理解して、キリストの人性である体の「遍在」を認めない。ルターの立場においては、キリストの体が聖餐において場所的、客観的、実体的に現臨するので、陪餐者の信仰を問うという点は弱くなる。ところが、カルヴァンの立場では、天上のキリストが聖餐において聖霊により現臨するのであるから、天上のキリストとの交わりが成立するためには陪餐者の信仰が問われることとなる。それゆえ、聖餐に相応しく与るための信仰を訓練する教会訓練が重視されるのである。<sup>3</sup>

<sup>2</sup> 牧田吉和「改革教会の伝統の立場から」『まことの聖餐を求めて』(芳賀力編、教文館、2008年)181-84頁。カルヴァンの聖餐論のルターやツヴィンクリとの比較については、赤木善光『宗教改革者の聖餐論』(教文館、2005年)に詳しい。

<sup>3</sup> 牧田吉和、前掲書、184-91頁。赤木善光、前掲書、513-530頁。

### 3. カルヴァンの教会訓練

聖餐は、天上のキリストとの交わりを与え、永遠の生命を確証するものであるから、信仰をもってそれに相応しく与ることが求められる（IV・17・40）。しかし、相応しさとは「己の行いによって相応しくあろう」とすることではなく（IV・17・41）、キリストの憐みのもとに相応しくない自分自身を差し出すことである。「彼の憐れみによって相応しい者とされんがために己れの下劣さと（更に言えば）相応しくないことを差し出すこと。」（IV・17・42）。

聖餐に与る相応しさが、キリストの憐みのもとに相応しくない自分自身を差し出すことにあるとするならば、信仰とは当然自らの罪の認識と悔い改めを伴ったものでなければならぬ。自らの罪の認識と悔い改めを持たない人々の陪餐は停止されねばならないし、そうならないように日常的に御言葉による訓戒がなされていなければならない。訓戒を受けて生涯を通して悔い改め続けることがキリスト者を再生へと導き、キリスト者に「キリストとの交わりである主の晩餐にあずかりつつ、天を目指す行路を歩み通させる。」<sup>4</sup>

カルヴァンは、聖餐を相応しく受けさせるために、教会における訓練（disciplina）を重んじた。その訓練とは、第一に個人的戒告、第二に公的戒告、第三に陪餐停止であった。

個人的戒告とは、信徒が「義務を進んで果たさなかったり、異常な挙動があったり、品性を欠く生き方をしたり、非難に価する何らかの悪を犯したときに」、信徒や牧師が個人的に戒告することである。（IV・12・2）。この個人的戒告は、牧師の福音の告知というつとめの中にも位置づけられる。（IV・3・6）。

公的戒告は、教会法廷における厳重な戒告である。すなわち、個人的戒告によって悔い改めない者は、証人を立ち合わせた二度目の戒告を経て、「長老たちの合議である教会法廷」に召喚され、「公的権威によるやり方によって更に厳重に戒告される。」（IV・12・2-3）。

陪餐停止は、「冒瀆罪」を犯した者、すなわち「露わな姦通犯、放蕩者、窃盗犯、略奪者、暴動を煽る者、偽り誓う者、偽証人、その他この種の者、同様に頑迷な者（すなわち軽い罪として正当に警告されても、神とその審判をあざ笑う者ら）」を、教会がその共同体から排除することである（IV・12・4）。

ただし、陪餐の停止は「罪人を悔い改めに導くため」であるから、「罪人が教会に対して悔い改めの証しを示し、その証しによって躓きを能う限り取り除こうとしているなら、それ以上追及すべきでなく」陪餐の回復をなすべきである（IV・12・8）。陪餐の停止は「将来の断罪を予め警告して救いに呼び戻すという処罰」であり、「もしそれを受け入れるならば、和解と陪餐の回復が用意されている」ものである（IV・12・10）。

### 4. 今日の教会形成における聖餐の意義

#### （1）聖餐に基づく教会訓練の回復

これまで見てきたように、カルヴァンは、聖餐に相応しくあずからせることを通して信徒を訓練し、聖餐共同体である教会の形成を目指した。この聖餐共同体である教会が、すなわち、一つの契約によって神の民とされた契約共同体であり、終りの日に天上の生命を受けることを目指す終末共同体である。聖餐にふさわしくあずからせる訓練は、契約に忠実な、終末を目指す神の民を育てるものである。聖餐は罪の赦しと終りの日の復活の命を確証するものであるから、聖餐を停止されることは、罪の赦しと終りの日の復活の命の確証を停止されることである。

『ハイデルベルク信仰問答』

問 85 キリスト教的戒規によって天国はどのように開かれまた閉ざされるのですか。

<sup>4</sup> 高崎毅志『カルヴァンの主の晩餐による牧会』（すぐ書房、2000年）90頁。

答 次のようにです。すなわち、キリストの御命令によって、キリスト者と言われながら非キリスト教的な教えまたは行いを為し、度重なる兄弟からの忠告の後にもその過ちまたは不道德を離れない者は、教会または教会役員に通告されます。もしその訓戒に従わない場合、教会役員によっては聖礼典の停止をもってキリスト者の会衆から、神御自身によってはキリストの御国から、彼らは閉め出されます。しかし、彼らが真実な悔い改めを約束し、またそれを示す時には、再びキリストとその教会の一部として受け入れられるのです。<sup>5</sup>

トゥルナイゼンは『牧会学』の中で、ハイデルベルク信仰問答第 85 問を教会訓練の「誤った使用」と位置づけ、厳しく批判する。<sup>6</sup> しかし、カルヴァンの神学に基づくならば、聖餐が天上のキリストとの確かな交わりである以上、それを停止されることは天上のキリストとの確かな交わりを停止されることであり、悔い改めがなければその確かな交わりは停止された状態にとどまるということを忘れてはならない。

天上の生を確認するものとしての聖餐の認識と聖餐に相応しくあざからせるための教会訓練を、日本の諸教会は宗教改革の伝統に帰って回復しなければならない。

## (2) 聖餐に基づく告白的共同体の形成

聖餐共同体は契約共同体であり終末共同体であるから、それが正しく形成されるならばこの世の国民共同体を超えて存続する。

「聖餐式によって生まれる共同体は、国民共同体よりもはるかに深いものがあります。それはまったく一この際はっきり申し上げますが一国民の間の境などははるかに超えて把握されうるものです。と申しますのも、キリストのからだ一つまりこれは信ずる者の群れのことですが一それはいかなる国境、いかなる民族に属する人間をもすべて包括するからであります。」<sup>7</sup>

日本の諸教会において、教会が国家の推奨する価値観に左右されるのでなく、キリストの委託に基づいて正しくミニストリーを行うことが模索されてきた。ところが、現実には、特に主流派諸教会において、伝道が軽んじられ教会が形成されず、国家に対峙するどころか、教会自体の組織と財政の維持が困難になるという結果を生んでいる。その原因は「聖書の権威が正しく認められず、そのために垂直的次元を喪失したことによる。」<sup>8</sup>

福音派諸教会において、「聖書の権威」と共に聖餐と教会訓練が重視され、聖餐共同体としての教会形成がなされるならば、日本の教会史に新たな時代が到来するのではないか。

## おわりに

教会訓練に基づく聖餐共同体の形成は、神との契約に基づき終りの日の復活を目指して生きる神の民の形成である。このような神の民こそ、永遠で真実の不可視的教会につらなる、この世における可視的教会である。そして、国民共同体を超えるキリストの御国を証しする共同体、すなわち信仰告白的共同体でもある。教会の形成に、聖餐の正しい理解と教会訓練は欠かすことができない。共に聖餐に与ることの幸いを認識し、聖餐に相応しく与る姿勢を訓練することを通して、この世の力によって揺るがされない真実の教会が形成されるであろう。

<sup>5</sup> 吉田隆訳『ハイデルベルク信仰問答—証拠聖句付き』（新教出版社、2005年）154頁。

なお、引用に際しては行数を少なくするため改行を修正した。

<sup>6</sup> トゥルナイゼン『牧会学—慰めの対話』（加藤常昭訳、日本基督教団出版局、1961年）49頁。

<sup>7</sup> O・ブルーダー『嵐の中の教会—ヒトラーと戦った教会の物語』（森平太訳、新教新書、1989年）125頁。

<sup>8</sup> 小友聡による上田光正の見解の引用。小友聡「日本伝道の課題と展望」『伝道と神学』第1号（2011年）82-84頁。